

留学生のための物語日本史

第 16 話 坂本龍馬

「お前ら長州者は、御所に向けて大砲を放ったではないか」

西郷隆盛は長州藩代表の木戸貫治（きどかんじ）¹を怒鳴りつけた。西郷隆盛は、かなり太っていたために、ここでも座っていることができなかった。そのため、庭を闊歩しながら、たまに縁側に腰を掛けると木戸に怒鳴りつけるという状態だった。

「あれは、御所を敵にしたわけではない。蛤御門²の前に陣取った会津を排除したのだ」

木戸は、大男である西郷の恫喝のような大声に一步も引くことなく堂々とそのように答えた。身体は小さいものの、声は西郷に全く負けず、その声の張りは、西郷よりもよく響いた。

「だいたい、薩摩の皆さんこそ、そもそも公武合体などということを主張し、イギリスと手を組み、国を売るつもりではござらぬか」

木戸は、涼しい顔で言った。

「なんだと、国を売るだと」

「我が長州は、幕府とかそういうことでは動いておらん。この日本国をどうするか。欧米列強から日本国を守るために何をしなければならぬか、そのことを考えて活動しておる。会津のように、幕府を守るということを考えているのではない」

「なんだと。御所に向かって大砲を撃ちかけ、朝敵となったお前らが」

¹ 木戸貫治…木戸孝允のこと。他に、桂小五郎、木戸準一郎などの名がある。

² 蛤御門…現在の京都御苑の西側に位置する。「蛤御門の変」の名称は激戦地が京都御所の御門周辺であったことによる。今も門の梁には弾痕が残る。京都市中は戦火により約 3 万戸が焼失するなど、太平の世を揺るがす大事件であった。

「まあまあ」

座敷の奥に今まで黙って正座していた男が、両手を前にして二人の間に割って入った。この男、しっかりと五つ紋³の正装をしているが、普段はそのような服装でないためか、どうも似合っていない。どことなくだらしない感じがする。

「朝敵とか、過去のことではなく、未来の日本のことを聞きたいですな」

この男がそのように言うと、二人とも舌打ちをしながらうつむいた。西郷はそのまま立ち上がって庭の方に歩いて行ってしまったのだ。

「坂本殿と言われましたな」

薩摩側のもう一人の重鎮であり、西郷隆盛の幼馴染であった大久保利通が、しばらくの沈黙の後、口を開いた。

「土佐の坂本龍馬と申します」

「坂本殿は、何故、薩摩と長州、この数年来の敵対する二つの藩を一緒にしたいと思われるのか」

「そんなもん、あ、いや、これは失礼」

そう言って頭を掻く坂本龍馬に、大久保が先ほどと同じように穏やかな言葉遣いで話しかけた。

「いや、特に失礼とかそんなことはないので、あまりきつい方言でなければ、好きな言い方でかまいませんよ。木戸殿、それで異存はありませんな」

「もとより。坂本殿は土佐の御仁であれば、我らが咎めだてするものではござらぬ。また、言葉使いに注意されて、真意が伝わらぬ方が困ります」

木戸は、先ほど西郷と言い合っていた時とは違い、やはり大久保と同じように穏やかな物言いをした。

³ 五つ紋…背に一つ、両袖の後ろと両胸にそれぞれ一つずつ、合計五つの家紋のある着物や羽織。正式礼装用。

「じゃあ、遠慮しないで。まず、この二つの藩がいがみ合っているのは、この日の本の国が亡びる。それが理由じゃ」

「京の都で戦争を起こすとか」

「大久保殿、そのようなことを言っているのではございません。そもそも、神君家康公以前、日本の国は戦国で戦っておりました。京の都も何度も火の海に包まれています、全く日本は滅びません。そんなことではないんだなあ」

坂本は、自由に話してよいということなので、普段の話し方に戻った。いつのまにか、足は正座から、崩して片膝を立てた座り方になっている。

「では、教えていただけるかな」

「今の日本の国で、欧米とまともに戦ったことがあるのは、薩摩と長州だけなんだわ。欧米が日本を狙っていることは間違いない。幕府なんて、ペルリが大砲を撃っただけで弱腰になって、変な条約をどんどんと結んでしまう。このままでは、幕府は外国に魂まで売ってしまうわな。戦ったことのある二つの雄藩がその経験をもとに、欧米に戦って勝つ、そのやり方を研究し、日本の国を変えなければなりません。それなのにその二つの藩が、いがみ合い、殺し合い、そして経験をした人をすべて失っては、日本の宝の喪失。日本は結局、戦うこともできない腰抜けの幕府の主導になる。それでは国が滅んでしまう」

坂本は、平易な言い方で一気に話し、そして、ここで一呼吸置いた。何か反論があれば、二人から出てくるはずである。その反応を坂本は待っていたのである。しかし、大久保も木戸も、腕を組んだまま何も言わずにうつむいていた。

「日本のため……でござるか」

いつの間にか縁側に座っていた西郷隆盛が、ため息をつくような言葉で言った。

「そうよ。日本のためですよ、西郷さん。さっきから朝敵とか会津とか、そんなこと言っておったが、聞いていれば、結局は薩摩と長州の意地の張り合いで、日本のためというような話は全くしていない。そうではござらぬか」

「では聞くが」

西郷は身を乗り出してきた。

「手を組むかどうかは別にして、少なくとも長州と戦って殺し合うのはやめよう。しかし、その考え方が違えば、結局最後の場面でうまくゆかぬようになる。手を組まぬならば、そして、日本のために二つの藩が矛を収めるならば、当然に、その考え方を合わせておかなければならない。そうは思わぬか」

「ふむ、西郷殿の言うことも一理ある」

木戸は、唸るように言った。木戸は坂本に乗るか西郷に乗るか、迷っているようである。

「では、お互いの考え方を聞こうではありませんか」

「薩摩が先に坂本殿に意見したので、薩摩から言わせていただく。薩摩は、先のイギリスとの戦いで疲弊し、そしてイギリスには対抗できないとの考え方を持っておる。対抗するためには、日本を一つにまとめなければなるまい。そのために幕府と朝廷を一体化させ、そのうえで開国して欧米列強の新しき軍事や組織、制度、それらを学び、そして欧米列強に対抗する。そのように考えておる」

「それでは欧米に……」

「あいや、しばらく」

西郷の話に割って入ろうとした木戸に対して、坂本は大声でそれを制した。

「ここは、まず薩摩の話すべて聞くところではありませんか。反論はお控えください」

坂本の、珍しく厳しい声に、木戸は話すのをやめるしかなかった。

「西郷殿。それでは、日本が強くなるまで、制度などを学ぶ前に欧米列強が占領しに来たらなんとされます」

「それは、戦って死ぬしかない。いや、そうならないように早く学ばなければならない」

「西郷さんのおっしゃる通りでしょう。すぐに手を打たなければ間に合いますまい。では、幕府と朝廷を一体化させると言ったが、どのようにさせるのか」

「皇女和宮様がお輿入れ……」

「西郷さん」

坂本は、少し呆れたように言った。

「それで、一体化になりますか」

「ふむ」

「男女は一体化できますが、朝廷と幕府、もっと言えば双方の考え方と伝統が一体化することはありません。歴史が違う。それを形式的に一体化させて安心している。では篤姫様がお輿入れになって、薩摩と幕府は一体化されたのか。今までも公家からお輿入れされたことは多かったが、なぜ今まで公家と幕府は一体化しない。危機だからと言うならば、その危機を朝廷と幕府が共有しなければなりません。共有しているのでしょうか、西郷さん」

坂本は、グッと強い言葉で西郷を責め立てた。西郷は最も自分たちの考えで曖昧なところを突かれてしまったので、何とも言いようがない。赤い顔をしてうつむくしかなかった。

「では長州のお考えを伺いましょうか」

木戸が正座のまま進み出て自分の考えを述べ始めた。坂本が目の前で西郷の考え方を遣り込めるのを見ていただけに、気分がなんとなくよさそうだ。

「我が長州は、そもそも幕府の行った不平等な条約を破棄し、そして欧米列強の勢力をすべて排除する。そのうえで、幕府に責任を取らせ改めて外交を一からやり直しさせるべきと存ずる」

「木戸殿、下関で戦争しても完膚なきまでやられてしまっているのに、どうやって条約を破棄し、どうやって平等な条約を結ぶおつもりか」

「当然、交渉で」

「木戸殿、古今東西、戦争に負けた相手と平等の条約を結ぶようなところはありませんが、負けた日本がどうやって条約を結ぶのでしょうか。ましてや武力的背景もなく、生意気なことを言えば、欧米列強すべてを敵に回し、そのまま負けてしまう。そして占領されてしまうので

すぞ。それで日本を守れますかな」

坂本は、今度は木戸を責め立てた。

「坂本殿、では貴殿はどうするおつもりか」

木戸がやはり西郷と同じようにうつむいてしまったのちに、大久保が坂本に詰め寄った。

「まずは日本を一つにしなければなりませんまい」

「ふむ。その方法を聞いておる」

「そのためには会津の松平容保（かたもり）、桑名の松平定敬（さだあき）、そして一橋慶喜を倒さねばなりませんまい。幕府ではなく、その三家を倒す。目標をそのように設定すれば、薩摩も長州も同じ目的を持てるのではないか」

「確かに。公武合体をするのに最も邪魔をしているのがその三家だ」

西郷は坂本の言葉に感心した。

「ふむ、それならば幕府を敵にする必要もない。しかし、その三家を幕府が擁護したらなんとする」

「その時は、幕府を倒すしかありませんまい。もとよりその覚悟はせねばならないのではないか。しかし、悪くもない幕府をすべて初めから敵に回すのは、いたずらに敵を増やすものであって兵法の常道を逸脱しているように感じる」

坂本は、木戸の言葉に当然の道理を説くように言った。

「なるほど、で、欧米列強との間はどのようにする」

「そもそも一つになってから、そこで決めるべきものと存ずる。薩摩の方には申し訳ないが、薩摩単独だから負けたのであって、日本全体が束になってかかれば欧米列強といえども簡単に負けるものではありませんまい。一方長州には申し訳ないが、武力の背景なく条約などを何とかできる話もない」

そう言うと、坂本龍馬は懐から西洋式の拳銃を取り出した。

「これならば、あなた方が刀を抜く前に、あなた方に弾をお見舞いできる。まずは、軍備兵

器を整え、戦えるような軍を作ることが最も重要。実際に戦うのではない、戦ったら手強いと思わせる。そのうえで、条約を改正しなければなりません。そこまで攻め込まれないようにするのが、団結の力であると存ずる。そのためには薩摩と長州、この二つの欧米と戦った藩が手を組み、そして、欧米と戦った経験を持ったところが、幕府そのものよりも強いということ。を世に知らしめ、天皇のそばにいてだましている獅子身中の虫⁴である会津や桑名や一橋を排除し、そして天皇を中心に外交を行う必要があるのではないか」

「なぜ幕府ではないのだ」

西郷は言った。西郷にしてみれば島津家から篤姫が幕府に輿入れしていることから、幕府をないがしろにすることはできない。

「西郷殿、そもそも征夷大將軍は、夷狄（いてき）⁵を排除する將軍であって、夷狄となれ合うものではごぞいますまい。外国との交渉は一手に朝廷が行うのが、古来からの筋でございましょう。また、長州の言う通りに、幕府は不平等の条約を結んだ。そのことを排除するには、幕府が正式な交渉相手ではないということをお知らせしなければなりません。そうならば、外交の場面から幕府を排除し、そのうえで、改めて交渉を行う必要がある。不平等な条約を押し付けられ交渉で負けた時点で、欧米との間で幕府が活躍する場はなくなった。それとも、幕府にまだ任せられるのか。ならばなぜ、公武合体を言い、幕府単独での外国の排除を主張されないのか」

「うむ。その通りだ」

西郷は、自分に非があると思えば、すぐに自分の意見を引っ込める潔い部分がある人物だ。坂本に説得された西郷は、そのまま引き下がった。

「西郷殿、それでは、長州との間に盟約を結ぶことに異存はないかな。それとも、まだ反論がござるかな」

⁴ 獅子身中の虫…内部にいながら害をもたらす者や、恩を仇で返す者の例え。

⁵ 夷狄…古代中国で東方の未開国を夷、北方のそれを狄と言ったところから、未開の民や外国人、野蛮な民族のこと。

坂本は、言った。

「長州に異存がなければ」

「もとより、異存はない」

「しかし、これではほかの武士の意地が立たぬのでは」

大久保が珍しく反対的な意見を述べた。坂本は、その言葉を聞いて、急にカラカラ笑い出した。

「いや、これは失礼した。私、坂本龍馬は、とっくに脱藩してしまい日本国のことは考えても、武士の意地とかはすでに捨ててしまおうた。そういう難しい話は武士同志でやってください」

西郷は、大久保の肩をその大きな手で叩いて首を横に振った。すでに意地とかそういうことを話す段階ではないのである。

「では、こういうことで」

これが世にいう「薩長同盟」である。この時、のちに維新の三傑といわれる西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允（きどたかよし）が顔を合わせた数少ない機会である。その後、第二次長州征伐が幕府主導で行われたが、薩摩は出陣を拒否し、長州を支援する。幕府軍は各地で苦戦し、途中、将軍徳川家茂（とくがわいえもち）が陣中死することによって終焉する。

なお、その同盟の盟約は次の六条と伝わっている。

一、戦いと相成り候時は直様二千余の兵を急速差登し只今在京の兵と合し、浪華へも千程は差置き、京坂両処を相固め候事

一、戦自然も我勝利と相成り候気鋒これ有り候とき、其節朝廷へ申上屹度尽力の次第これ有り候との事

一、万一負色にこれ有り候とも一年や半年に決て壊滅致し候と申事はこれ無き事に付、其間には必尽力の次第屹度これ有り候との事

一、是なりにて幕兵東帰せしときは屹度朝廷へ申上、直様冤罪は朝廷より御免に相成候都合に
屹度尽力の事

一、兵士をも上国の上、橋会桑等も今の如き次第にて勿体なくも朝廷を擁し奉り、正義を抗み
周旋尽力の道を相遮り候ときは、終に決戦に及び候外これ無きとの事

一、冤罪も御免の上は双方誠心を以て相合し皇国の御為皇威相暉き御回復に立至り候を目途に
誠心を尽し屹度尽力仕まつる可しとの事⁶

この時の、同盟の盟約は幕府を倒すとはなっていない。討幕に大きく傾くのは、坂本龍馬が暗
殺されたのちの歴史の流れによるものなのである。

⁶ 薩長同盟六条…

一、幕府と長州の間で戦となったときは、薩摩は二千ほどの兵をすぐに出し、在京の兵と合わせ、大阪にも千人程度置き、京阪両方を固める。

一、長州藩が幕府に勝利しそうであれば、これを朝廷に上申し、長州のために尽力する。

一、万が一、劣勢な場合でも、長州藩は半年や1年では壊滅することはないので、その間は必ず尽力する。

一、幕兵が江戸に戻った際は、朝廷に上申し、すぐに長州藩の冤罪を朝廷に許してもらおうよう尽力する。

一、幕兵が上京し、一橋・会津・桑名が畏れ多くも今のように朝廷を擁するならば、正義を阻み交渉の道を遮るとして、最後は決戦に及び、これ以外はないとする。

一、長州藩の冤罪が許されたら、薩長双方が誠意をもって力を合わせ、皇国のため、天皇の威光が回復することを目標に尽力すること。

第17話 大久保利通

明治11年5月14日、内務卿大久保利通の自宅に、山吉盛典（やまよしもりすけ）が来訪した。山吉は福島県令で、その日に福島県の赴任地に行く挨拶を大久保にしに来たのである。当時は電車などはないので、福島までは馬車の旅である。そのために早朝に挨拶をして、なんとかその日のうちに、福島に着かなければならないと思っていた。

「朝の忙しい時間に押しかけまして失礼いたします」

「山吉殿ですか。このような格好で申し訳ない」

大久保は自邸の応接室に朝用のパイプを片手に出てきた。まだ寝巻に、洋風のガウンという姿で、今まで自宅でくつろいでいたのか、あるいは、まだ寝起きそのままであったのか、いずれにせよ、普段、内務省できびきびと部下に命令し、仕事を片付けている大久保利通とは全く違う家庭の顔をしていた。

「朝から煙草ですか」

山吉は、少々恐れを感じながらも、あまりの煙に大久保に尋ねた。

「まずいか」

「いえ、普段はそのようなことを伺えませんので、ぜひ、お伺いしたかったところを、このような機会に……。いや、無礼であれば……」

「無礼なもんか、いや、朝、とにかく濃く淹れたお茶を何杯か飲んで、そのうえ、この煙草を何服かしないと、目が覚めなくて困る。昔、まだ戊辰戦争で戦っていたころはまだそうでもなかったが、岩倉卿と欧米を回った船の中で、このような悪癖がついてしまい、今では無ければならないような感じになってしまう」

「失礼ですが、どのお茶とか決まりがありますでしょうか」

「そういうことを言うと、賄賂でそれを持って来る者がいるから普段は言わないのだが、山

吉殿は、福島だから大丈夫であろう。お茶は京の宇治茶、そして、煙草は指宿（いぶすき）煙草と決めておる。福島ではなかなか手に入らない逸品だ」

「はあ」

「まあ、福島ではお茶も煙草もできるが、どうも、やはりこういうところが薩摩が抜けないのかな」

大久保は大声で笑うと、その濃く淹れてもらったお茶を飲んだ。

「いやいや、それは恐れ入ります。福島の煙草も今度お持ちしますので、ぜひ試してみてください。いや、もちろん賄賂などではありませんので、念のため」

山吉は、恐縮したように言った。元々大男の大久保に比べると、山吉は少々見劣りがする。その男が威圧されているのだから、より小さく見えてしまうのである。

「ところで、時間はあるのか」

「はい、あ、いや、今日のうちに福島に発ちますので、そのご挨拶と思ひまして」

「それならば東京でなんか次の約束があるわけではあるまい。馬を少々早く走らせればよいのだから、もう少し時間はあるかな。まあ、もちろん命令ではないのだが」

「はい、大久保卿がそうおっしゃるならば、お話を伺います」

山吉は、本当は早く出発して福島に向かいたかったが、大久保に止められては無下に断れない。また、この時の大久保利通には、何か話をしないで辞去することができない、ただならぬい雰囲気を感じられた。

「悪いねえ。山吉殿」

大久保はパイプを深く吸うと、大きく白い煙を吐き出した。至福の表情である。

「ところで山吉君は、西郷隆盛を殺したのは私だと思っているかね」

「は、いえ、滅相もない」

「無理に否定しないでいいんだ。巷では私が西郷を殺したことになっているらしい」

大久保は何か悲しげに笑っている。

「それは、不平士族の歪んだ見解であると思います。私は米沢出身で福島の県令を拝命しておりますので、薩摩のことも分かりませんし、不平士族のことも理解できかねます」

「政府の中にもそのような見方があるらしい。薩摩の人間ばかりではなく、日本の中の多くの人が、西郷を好きだった。だからどうも私が恨まれるようだ」

大久保は、懐から一つの書状を出した。

その書状には表書きに大きく「有司専制」(ゆうしせんせい)⁷と書かれていた。そして中には、「国会も憲法も開設せず、民権を抑圧している。法令の朝令暮改(ちょうれいかいぼ)⁸が激しく、また官吏の登用に情実・縁故が使われている。不要な土木事業・建築により、国費を無駄使いしている。国を思う志士を排斥して、内乱を引き起こした。外国との条約改正を遂行せず、国威を貶めている」と五ヶ条の糾弾内容が書かれ、「大久保の罪」と書かれていたのである。

「これは」

目を通して山吉は大久保の方に目を向けた。やはり大久保はパイプをふかしながら、窓の外を眺め、そして何か悲しい笑顔を見せていた。このような大久保を見ることはまずない。

「まあ、簡単に言えば、大久保とかいうヤツは政治を牛耳って好きなようにしている！ その証拠に、アイツは同じ釜の飯を食っていた西郷隆盛を殺したじゃないか！ 天誅！ ということだ。この書状は、大警視の川路利良(かわじとしよし)がまとめてくれたのだが、これをもって暗殺計画をしているのが、加賀の人間だったらしく、石川県人に何ができる、大久保の方が強いと言って追い返したそうだ」

「それは大久保卿の方が強いでしょう。我々などにらまれただけで……」

「そんなに怖いか」

「はい、特に困碁に負けた後などは……失礼いたしました」

⁷ 有司専制…官僚が独断的に事を取り計らうこと。明治初期、自由民権派が藩閥政治を批判した言葉。

⁸ 朝令暮改…朝出した命令を夕方にはもう改めること。方針などが定まらないこと。

大久保は、今度は悲しくない感じで笑っている。

「そうか。囲碁に負けた後な。それよりも西郷が死んだ後の方が荒れていたと思う」

「はい」

山吉は何を答えていいかわからない。

「西郷と私は、何しろ生まれてから奴が死ぬまでずっと同じであった。西郷は常に大きな人物であった。私などは全然足元にも及ばない。あの西郷が、まさか先を見ずにあんな土族の乱に力を貸すとは全く思わなかったよ」

「はい」

「私はあの時、薩摩に行って西郷を説得すると言ったのだ。私が説得すれば、西郷は、絶対に分かってくれたはずだ」

「いえ、しかし、大久保卿も捕まったり殺されたりしては、この日本が」

「いや、そんなことはない。そもそも西郷が私を殺すはずがない。捕まえない。西郷はそういう男だ。捕まえるとか、殺されるとか、それは西郷を全く知らない人の言うことだ」

大久保の語気は自然と荒くなっていた。山吉は、自分にその怒りが向かっているような錯覚をして、なんとなく小さくなっている。

「しかし、お言葉ではありますが、薩摩の不平土族の人々がすべて西郷様のように素晴らしいお志の方とは思えません。部下の方に殺される、というようなことも十分にあったでしょう。政府はそれを心配して……」

「冗談じゃない。それならば、それで私が死ねばよい。私が死ねば、西郷はそのような部下と一緒に戦争はできないと言って、戦争をやめ、政府に戻ってきてくれるはずだ。私が残るよりもはるかにその方が政府にとって良かったのではないか」

「そのようなことはございません」

山吉が必死に否定したが、大久保は懐から別の書状を二通出した。先ほどの書状よりも古い。端の方は少し切れかかっている。

「西郷からの手紙だ。生前、西郷が私に様々な忠言をくれた。私は毎日、その手紙をすべて読み返し、そして、その日の仕事の予定に合わせて、その時に最も合った手紙を選び、このように持ち歩いている。今でも思う、私が仕事をしているのではなく、西郷の、そう、死んだ西郷が手紙で命令されたことを私が実行している。そのように思っているのだ。西郷が死んでから思うのは、西郷は、とてもとても、私などでは思いもつかない忠義の士で、そして、私たちには全く想像もできない、つかみきれない、全貌も分からないほど大きな人物だったのだ」

大久保は、涙こそ流してはいないが、悲しい笑みをたたえた。山吉は何も言えなかった。

「まあ、政治がうまくゆかない時の愚痴だよ。悪いね」

「いえいえ」

「でも、逆に私が反乱を起こして西郷が私の代わりに残っていたら、先ほどの加賀の不平等士族が書状に書いたような有司専制と言われたであろうか。西郷ならばそんなことはない。そのような不満もすべて取り込んで、日本国のために何ができるか、彼らをどのように役に立てるか考えたはずだ。そしてそれをやっていたはずだ。しかし、西郷に全くかなわない私にはどうしていいかわからない。それが悔しい。毎日、朝に晩に、ああ、西郷が生きていれば、そう思うよ」

「いえ、大久保卿も素晴らしく、我々からでは手の届かぬ存在でございます」

「そんな見え透いたお世辞は、うれしいがしなくてよいよ。西郷には絶対になんかできない。だから、私は日本中の英知を集め、官僚制を作り、その英知の集合体で何とか切り抜けようと思う。そのためには、内務省などの各省庁に、旧幕府も新政府も、平民も士族も関係なく、すべての英知を集め、そして物事を決めなければならない。そのように思うのだ。それでも、西郷が考えることの10年後ろしか付いて歩けない」

「そんなにすごい方だったんですか。西郷様は」

山吉は、実は米沢出身で、戊辰戦争では新政府に対抗した側の士族であるから、西郷とはあまり接したことがない。このように県令になって、やっと大久保の邸宅に挨拶に来れるように

なっただけだ。明治6年に薩摩に下野、そのまま西南戦争で散ってしまった西郷隆盛とは接点が少なかったのである。

「そりゃすごかった。山吉殿は米沢出身だから分かると思うが、西郷は優秀であると思えば庄内の菅秀三郎（すげひでさぶろう）殿など、もともと敵方であった人物とも親しく話し、そして取り込んで日本国のために働かせてしまうことができる。現在の殖産興業も、すべて庄内藩で一度試している。昨年明治10年の内国勸業博覧会に庄内藩の物品がどれほど多く並んでいたか。あれを見ても西郷のすごさが分かる。まあ、あの時は、庄内が反乱を起こすのではないかとして福島県令の山吉殿のところにもかなり負担があったと思うが、しかし、そのような時に軽挙に反乱を起こさせない力まで、西郷は持っていたんだ。私などは、薩摩と長州ということばかりに気を取られてしまい、とても西郷の考えには及ばない。昨年の博覧会の時に、この西郷を殺したとされる私のところに、笑顔で接し頭を下げ、そして西郷が命名したと周りに聞こえないようにして茶筒を持ってきた庄内藩の人々を見て、とてもとても、かなわない、そう思ったよ」

「いえ、その庄内藩の人々を見て、そのように思うことができることが、大久保卿の素晴らしいところでございます」

山吉は、お世辞でも何でもなく、そのように言った。ほかの政府の人々ならば、「西郷」という言葉で過剰に反応し事件になっていたであろう。

「西郷は、自分が死んで、そのことで日本国に足りないものを我々に教え、そして、日本を強くした。そう思っている」

「はい」

「だから、先日重野安繹（しげのやすつぐ）殿に、西郷の伝記の執筆を頼んだところだ。何しろ西郷のことを私ほど知っている者はいないからな。今度、時間を見つけて西郷について話ろうと思うのだ」

「それは良いことでございます」

「ようやく戦乱も収まって平和になった。よって維新の精神を貫徹することにするが、それには30年の時期が要る。それを仮に三分割すると、明治元年から10年までの第一期は戦乱が多く創業の時期であった。次の明治11年から20年までの第二期は内治を整え、民産を興す、すなわち建設の時期で、私はこの時まで内務の職に尽くしたい。明治21年から30年までの第三期は後進の賢者に譲り、発展を待つ時期だ」

「そんなことはおっしゃらずに、何年でも新政府の仕事を続けていただきたいと思います」

「いや、そもいかない」

「なぜですか」

「一つは、西郷の手紙がないからだ」

「はい」

山吉は、急に何を言い出すのかというような、変な声をあげてしまった。

「さっきから言っているだろう。私は西郷の手紙に書いてあるようなことをやっている。西郷の手紙では内治を整え殖産興業を興し、そして兵を強くするところまでしか書いていないのだ。そこから後のことは、西郷が死んでしまった今となっては聞きようがない。長州の者どもが何を言うか分からんが、私は、この維新政府は、私と西郷と、そして去年死んだ長州の木戸が行ったと思っている。そして、木戸も西郷も死んでしまった今となって、彼らの考えていたことの姿を見れば、それで私の役目は終わりだ。それ以上のことは彼らも、そして日本の国も望んでいない」

「そんなことはありませんが」

「山吉殿は優しいねえ。しかし、西郷が許してくれないのだ」

「どういうことですか」

「先日、夢を見てな。どうも、西郷とこの日本国の将来について、私は口論していたらしい。しかし、どうにも私の方に分がない。だんだんと議論で私は西郷に追い詰められて、そして高い崖から落ちた。自分の脳が碎けてピクピク動いているのがありありと見えたんだ」

「ひどい夢ですね」

「いや、これは、あまり出しゃばってはいけない、西郷も木戸も、死ぬことで後進に道を譲った。お前も早く道を譲れ、そう言われているような気がしてならない。人生というのはいままでできているものだ。もしも、私が明日死んだら、このことを広く多くの者に伝えてくれないか」

「そんな縁起でもないことを」

「新政府になって、靴を履くようになった。そのために、雪駄（せった）の鼻緒が切れるということで不吉な未来を知ることができなくなってしまった。それを西郷は教えてくれたのかもしれない」

山吉は、この後もう少し雑談に付き合い、そのまま福島に向かった。

時間は午前8時、山吉のすぐ後、大久保は明治天皇に謁見するために二頭立ての馬車で赤坂の仮皇居に向かった。その途中、紀尾井町清水谷において、暴漢6名に馬車が襲撃されてしまう。暴漢は馬の足を切り、御者を殺した後、馬車の中に突入。大久保は、その主犯格の石川県士族島田一郎に向かって「無礼者」と一喝したが、「天誅」という一言で大きく切り下げられた。介錯（かいしゃく）⁹に首へ突き刺さした刀は地面にまで達しており、事件直後に駆け付けた前島密（まえじまひそか）によれば「肉飛び骨砕け、又頭蓋裂けて脳の猶微動するを見る」と表現されるような状態であったという。島田一郎をはじめとした6名の手には、「斬奸状」（ざんかんじょう）¹⁰と書いた、大久保が持っていたものと同じ書面が握られていたのである。

大久保利通、享年49歳。維新の三傑といわれる明治維新を強力に進めた巨人が地上からいなくなった瞬間であった。

⁹ 介錯…切腹の際、本人を即死させて苦痛を軽くするため、切腹する人の首を切り落とすこと。

¹⁰ 斬奸状…悪者を切り殺すにつき、その理由を書いた文書。